

ミョウガの促成栽培における休眠打破処理の効果

鮫島國親・*和田文男・*福元伸一(鹿児島県農業試験場・*鹿児島県農業試験場熊毛支場)

Kunichika SAMESHIMA, Fumio WADA and Shinichi FUKUMOTO: Effect of Breaking Dormancy Treatments on Growth and Yield of *Zingiber mioga* Rosc. in Forcing Culture

ミョウガの超早出し栽培技術を確認するために、地下茎の冷蔵期間並びに出庫時期の違いが萌芽及び生育、花蕾の発生、収量等に及ぼす影響を検討した。

1. 材料及び方法

供試材料は夏ミョウガを用いた。地下茎の冷蔵温度は3℃とし、冷蔵期間として、1989年2月2日から9月1日(前作露地株)、7月4日から9月1日、9月16日及び10月1日、8月1日から10月1日、10月16日、11月1日、11月16日、12月1日及び12月16日(以上前作促成栽培株)の各処理区を設けた。いずれも催芽後定植した。栽植本数は476株/aで、最低夜温は18℃とし、電照は夜間3時間の光中断方式で10月25日から開始した。

2. 結果及び考察

いずれの区も出庫後1か月以内で萌芽が始まった。このことから、前作促成栽培株では、2か月間以上の冷蔵によって休眠が打破されることが明らかとなった。生育は出庫時期が早い区ほど草丈の伸びや葉数の増加が早かったが、出庫時期が10月1日までの区は3月以降生育、特に草丈の伸びがゆるやかとなった。一方、10月16日以降の区は7月まで草丈の伸長と葉数の増加が認められた。

最終葉数はいずれの区も30枚前後であった。分けつ茎数は1~3本で、植付後比較的早く茎数が定まった。

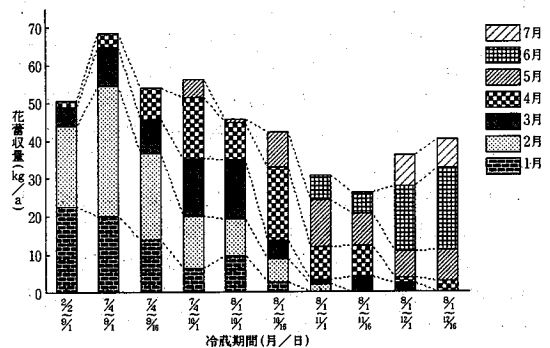
収穫始期は出庫時期が早いほど早く、収穫始期の主茎葉数は9月1日出庫区が14枚で、その他の区は10~12枚であった。収穫終期は出庫時期が早いほど早く、収穫期間は100~130日で区間差は少なかった。

収量は、出庫時期が早い区ほど早期(1~2月)の収量が多く、総収量も多かった。8月1日~11月16日冷蔵区は収量が最も少なかった。一方、出庫時期の最も遅い8月1日~12月16日冷蔵区は6~7月の収量が多く、11月出庫区に比べ収量が多かった。これらの収量差は収穫期間の長さとは比例しておらず、生育量と日照量等気象条件との関連が大きいと考えられる。品質は、9月1日、9月16日、10月1日に収穫した区は紅の濃いA品率が70%以上で、11月1日出庫区は最も低く40%であった。

以上の結果、ミョウガの促成栽培における休眠打破処理の効果は、前作促成栽培株の場合2か月以上の地下茎冷蔵により認められた。生育、花蕾発生期、時期別収量は冷蔵期間で異なり、出庫時期を変えることで収穫期のコントロールが可能となった。

第1表 地下茎冷蔵期間と生育、収穫期及び収量

冷蔵期間		6月1日			収穫		花蕾平均	
月/日	月/日	草丈	葉数	茎数	始期	終期	収量	花蕾重
月/日	月/日	cm	枚	本/株	月/日	月/日	kg/a	g
2/2	~ 9/1	152	28.8	3.7	1.4	4.23	50.66	10.1
7/4	~ 9/1	137	28.4	4.2	1.4	4.30	68.44	10.7
7/4	~ 9/16	132	26.6	2.6	1.4	4.30	54.00	9.8
7/4	~ 10/1	144	29.9	3.3	1.9	5.21	56.16	9.3
8/1	~ 10/1	124	26.9	2.9	1.9	5.21	45.66	9.3
8/1	~ 10/16	128	26.6	2.2	1.31	5.28	42.21	8.1
8/1	~ 11/1	126	26.2	2.3	2.14	6.25	30.58	7.8
8/1	~ 11/16	122	23.7	2.7	3.7	6.25	26.10	8.2
8/1	~ 12/1	114	22.0	2.6	3.26	7.16	35.99	8.1
8/1	~ 12/16	108	20.8	3.9	4.2	7.16	40.27	8.2



第1図 地下茎冷蔵期間と時期別花蕾収量